

KOBEの本棚

— 神戸ふるさと文庫だより —

第 81 号 平成 27 年 11 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



海外移住と文化の交流センター

神戸移住センター

今年、芥川賞が創設されて八十年になります。昭和十年に第一回の芥川賞を受賞した『蒼氓』は、ブラジル移民を題材にした神戸が舞台の小説です。著者の石川達三は昭和五年移民船に乗りブラジルへ渡航し、その体験を『最近南米往来記』として出版します。

国立移民収容所は、神戸に昭和三年に建設された移住者を送り出すための施設です。『蒼氓』では、この施設を舞台に移民船に乗り込むまでの八日間が描かれています。

移民収容所では出国手続きや健康診断のほか、移住国の言葉や宗教、国の習慣など日常生活に必要なことを学びました。施設名は昭和三十九年「神戸移住センター」と改称されます。昭和四十六年神戸港からの移民船が廃止、同年五月その役割を終えました。施設から旅立った移住者は約二十万人といわれています。

平成二十一年からは「神戸市立海外移住と文化の交流センター」として移住の歴史を伝えるとともに、在住外国人支援や芸術交流活動を行っています。国内では唯一残った移住関連施設です。

海の本屋のはなし―海文堂書店の記憶と記録

平野義昌（苦楽堂）

平成二十五年九月末、元町商店

街にあった海文堂書店が閉店した。

大正三年、海軍書の出版・販売

会社として創業、以来九十九年、

地域や人とのつながりを大切にし

てきた本屋だった。地域の独立書

店として、地元の作家や作品を紹

介するなど、神戸の文化の後押し

をしてきた。

創業百年を目前にした閉店の

ニュースは突然で、多くの人を驚

かせた。「エエ店やった」と多く

の人が語る海文堂書店とはどのよ

うな本屋だったのか。書店員とし

て最後まで支えた著者が、店の歴

史と仲間たちの記憶をまとめた。

官兵衛―鮮烈な生涯 播磨学研究所

編（神戸新聞総合出版センター）

播磨国の姫路に生まれ、稀代の

軍師と言われた黒田官兵衛。平成

二十六年の大河ドラマ「軍師官兵

衛」に合わせて開催された「播磨

学特別講座」十一回をまとめたも

のが本書である。

講師は、火坂雅志氏、玉岡かお

る氏等の作家、研究者、ドラマ制

作者。思想と行動の原点となった

姫路時代、九州で抱いた大望、キ

リシタンであったこと、肖像画や

遺品、テレビ美術等、様々な切り

口で官兵衛像が語られる。

上品な上質―ファミリアの考えるものづくり

ファミリア編（ダイヤモンド社）

ファミリアは子ども服の店であ

る。昭和二十五年「誰もがママの

身になって作ること」を合言葉に、

四人の女性によって神戸で創業さ

れた。創業まもなく阪急百貨店で

の販売が始まり、大きく発展する。

そして、刺繍付のデニムバッグな

ど多くのロングセラーを生み出し

た。多くの人々に支持されてきた

「ママが子どもにそそぐ愛情」の

精神は今も受け継がれている。

西新開地（西神戸）物語 神戸アーカイブ写真館 東充編・発行

今日「西神戸」と呼ばれる長田

区商業地域はどのような変遷を経

て成り立ったのか。写真を主体に

「長田地方の起こり」から「衰退

していく西神戸商業（昭和五十

平成六）」までを全十三章で辿る。

後半では「参考資料・写真集」

として「懐かしい西神戸周辺の風

景・暮らし」「懐かしい西神戸周

辺の風呂屋さん」といった項目を

立てて往時の写真を収録する。

「西新開地」と呼ばれた頃から近

年までの貴重な地域資料である。

人生を変えるMBA―「神戸方式」で学ぶ最先端の経営学

神戸大学専門職大学院（MBA）編（有斐閣）

MBAとは大学院の経営学専攻

またその学位のことをいう。神戸

大学MBAプログラムは、企業な

どで現に働いている人々を対象と

している。その特徴は、各人が現

在仕事で直面している問題を持ち

寄り、チームを組んで解決策を探

り学ぶという点にある。本書では

教授陣による講義の解説、チーム

の研究事例、卒業生インタビュー

などを掲載し、プログラムの実際

を明らかにしている。

168人の寄稿でつづる助け合いネット20年

塩尻道雄ほか編 東灘地域助け合いネットワーク

阪神・淡路大震災直後、東灘で

発足したNPO法人「東灘地域

助け合いネットワーク」が、二十

周年を迎え記念誌を発行した。同

法人は、被災者を支援するボラン

ティア団体として活動を開始。震

災ボランティア終了後も、地域に

密着した高齢者、障がい者中心の

支援を続けてきた。支援者、利用

者双方の寄稿によって綴られた貴重な活動の記録である。



明舞団地—まちづくり五〇周年記念誌

初田直哉・在間夢乃編 兵庫県
明舞団地は神戸市垂水区と明石市にまたがる丘陵地にあるニュータウン。開発から昭和三十九年の入居、そして現在までを写真と資料で振り返る。写真の多くは、ありふれた生活の一場面。それぞれに、時代が滲み、日本の高度成長期の記憶も重なって見えてくる。

全国各地のニュータウンの共通課題は、住民減少や高齢化である。本書には、新しい街づくりを目指すNPO法人や学生と連携した活動も紹介されている。

ふあうすと—1000年のあゆみ

あうすと川柳社編・発行

川柳の雑誌『ふあうすと』は昭和四年、相元紋太ら十八人の同人によって神戸で創刊された。本書巻頭には創刊号を収録し、八十六年間を折々の誌面から振り返る。戦時下、誌名改称するも終刊となるが、昭和二十一年に復刊を遂げる。阪神・淡路大震災時も刊行は継続された。

不思議な響きを持つ誌名の由来について、紋太をはじめ同人それぞれの説が興味深い。



岡本わが町—岡本からの文化発信

中島俊郎編 廣岡倭発行（神戸新聞総合出版センター）

地方の町づくり、地域活性化が注目を集める今日、神戸にも地元の魅力積極的に発信している例がある。それが東灘区の岡本だ。

阪急岡本駅とJR摂津本山駅を内包した便利な町として、また、芦屋や住吉といった高級住宅街の間に位置し影響を受けたおしゃれな町として人気を獲得してきた。梅林が有名であった江戸時代、文豪谷崎潤一郎との関わり等、歴史と文化を振り返る。岡本を愛する語り部たちが集まり生まれた、町の記録となる一冊。



II その他の新刊 II

ひと・いのち・地域をつなぐ—社会福祉法人きらくえんの軌跡 市川禮子（東信堂）

災害時の歯科保健医療対策—連携と標準化に向けて（一社出版）
近代公娼制度の社会的研究 人見佐知子（日本経済評論社）
県大物語—創立10周年・創基85周年記念誌 兵庫県立大学

神戸あんな人こんな人 その⑤

花森 安治 明治44年（1911年）～昭和53年（1978年）
編集者・グラフィックデザイナー

『暮らしの手帖』の初代編集長として知られる花森安治は、須磨の平田町に生まれました。神戸三中を卒業し浪人をしていた頃には、大倉山の図書館で多くの時間を過ごし、平塚らいてうの本を読んで女性解放運動に感銘を受けたといいます。旧制松江高校、東京帝国大学へと進学し、学生新聞の編集などに参加しました。

在学中から化粧品会社で広告の仕事を手伝い、大学卒業後に徴兵されますが結核のため除隊、その後大政翼賛会で国策宣伝の仕事を行いました。有名な「ぜいたくは敵だ」などの標語も彼の手によるものだと言われています。

終戦後、大橋鎮子を社長に衣装研究所（のちの「暮らしの手帖社」）を設立し、昭和23年『美しい暮らしの手帖』を創刊。企画、執筆、レイアウトから表紙画まで全般的に手がけました。徹底的な商品テストや、企業の広告を一切載せないスタイルが好評を博し、全盛期には100万部を超える人気雑誌となりました。

庶民の暮らしの向上に大きく貢献する雑誌を世に送り、昭和53年に亡くなるまで反体制派として社会や企業に変革を求め続けた背景には、戦争に加担してしまった後悔も込められていたのでしょうか。自著『一銭五厘の旗』では「ぼくらの暮らしをなによりも第一にする」という強い決意を謳っています。

